

本間貴裕 × 福島弦 × 山川咲

「SANU」という共同体。自然に魅せられた3人の邂逅秘話

人と自然の共生をテーマにしたライフスタイルブランド「SANU」の新メンバーとして、CRAZY創業者の山川咲が参画することを発表させていただきました。

ここでは、山川咲が「SANU」に参画することになった経緯を中心に、創業者／ブランドディレクターの本間貴裕、CEO／代表取締役の福島弦との対話をお届けします。

「マンションのお隣さん」から

本間貴裕（以下、本間）：まず、最初の出会いの話からでしょうか。かなり昔からお互いに知ってはいたけど、きちんと認識したのはお隣さんになってからじゃないかな。

福島弦（以下、福島）：二人が同じマンションのお隣さんだったんだよね？それもすごい話だけど（笑）。

山川咲（以下、山川）：あれはもうNuiができてから5年以上前の話だね。でも、最初は挨拶程度だった。

本間：だから、薄い関係の時間がものすごく長くて。でも、告白みたいだけど、その頃から興味はあった。咲ってばあっと明るくて挨拶もめっちゃパワフルで、センスもあるし。CRAZYの組織論にも興味があったから、いつか話をしたいと思ってた。一気に距離が近くなったのが、今年の非常事態宣言の頃。K5に泊まりにきてくれた時だね。

山川：うんうん、その日のことは忘れもしないな。貴裕にK5の案内をしてもらって、そこにある熱に自分と通じるものを感じたの。そして、夕方に「青淵-Ao」でひとりお酒を飲みながら、初めての小池都知事の緊急会見をはじめましての人たちとみんなで見てたあの異様な光景。未知の未来が訪れる恐怖みたいなものがあるって、翌々日の奄美行きフライトをその場で押さえたりして。都内を離れる前にと貴裕に連絡して、初めてちゃんと話したという。

本間：コロナで大変なこともたくさんあったけど、コロナの中だったから立ち止まる時間もできて、ほんとうに何が今の時代に必要かを話せし、咲が奄美に行ったりして、結果的にSANUは進化したような気がするね。

山川：ほんとうに。この8カ月の出来事がSANUへのストーリーになってるしね。

本間：咲にSANUに入ってもらうからには当然惹かれてる理由があるわけだけれど、一言で言うところ「鮮やかな色」って感じ。意見がはっきりしてるし、ユニークだし、しかもそれを明るく言い放つところがめっちゃ刺さって。個人として仲良しな関係でもハッピーなんだけど、仕事をともにするという、いわゆる「仲互いをするリスク」をとってでもこの人には深く刺してみたいし、刺されてみたいって思った。深くまでいけると絶対に面白いなと思える数少ない人だった。弦もそうだったんだけど。

福島：俺は長く一緒にいるから本間がシリアスなモードになる瞬間を知ってるけど、咲ちゃんと話しに行く前は俺も話しかけられなかったもん。「どうなるかわからないけど話してくるわ」って言った時にすごくシリアスになって、SANUの発表前もそうだったんだけど、これは真剣に向き合ってるんだなって横で見ても感じた。

本間：だって、山川咲って鈍角で刺しにいつでもやられそうじゃん（笑）。とにかく、右脳的というか、咲の「鮮やかな色」に俺は惹かれた。これはSANUとしてシナジーが生まれそうだから以上につぶさる先でそれ以上の違う色、お互いが予想し得ない角度のものが出てくる気がしたんだよね。

「自然を愛する人を増やす」という文化情勢に不可欠な存在だった

福島：ここで俺の告白を挟むとき、派手さとはむしろ逆で、こんなに人の話を聞いてくれるんだっていうのが大きかった。咲ちゃんはクリエイティブの塊で、自分の話をどこまで聞いてくれるか最初は不安だったんだけど、人の話をほんとうによく聞いてくれる。この人なら自分が思ってることを伝えて、何か一つの大きな形として、さらに人の心に深く染み込ませてくれるんじゃないかなと思った。

本間：すごい印象的だったのが、参戦が決まってまだ間もない頃、SANUのブランドとして掘り下げなきゃいけない部分を長文でリストにまとめてくれたこと。それを見て弦がめっちゃ感動してて。インスピレーションの前に、この人はロジカルに掘る人だって。やっぱりCRAZYであれだけのものを作るには、ロジックと熱量とそこにかかる時間とインスピレーションの全部が必要なんだって。スポーツもそうだけど、ただセンスだけじゃいけないところもあるじゃん。その一部が見えたような感覚だった。

山川：私はさ、貴裕と最初にいろいろ語った時、生まれて初めて「なんか、この人には敵わないな」って思った。時代の裂け目というか、感性が研ぎ澄まされてたタイミングで話したこともあって、結構深い話をして共鳴して、なんか投資家じゃないけど「この人に賭けてみたい」と思わせる人だった。まだSANUの名前もなかった頃で、自分も次また起業をしようと思ってただけで、この人に誘われたら一緒に会社でもなんでもやるだろうなっていう予感があったな。

本間：こうやって話すのいいね、めっちゃ自己肯定感の中を泳いでる気分になる（笑）。弦の印象も聞きたいな。

山川：弦がいるのがいいよね、SANUというチームは。冷静で情熱的で、知的で柔らかくて。一見混在しなさそうなのを持ち合わせている稀有な人だと思う。まだそんなに時間を過ぎてなかったけど、貴裕が付き合ってるのかと思うくらい弦の話をするからさ、一緒にいて会社という感覚がなくて、それが最初の興味でもあった。CRAZYでも組織を作ってきたけど、ここには人同士や人と事業の新しい付き合い方が創り出されそうで、目が離せないという感じ。私たちは勝たなくてはいけないからね。より大きなフィールドで。でも、それが既存のビジネスのスキームを超えたところで実現しようだと思っている。

福島：ヒロとまずずっと話しているけど、SANUが目指すのは世界。30年かけて売上1兆円を目指したいと思ってる。「Live with Nature. 自然と共に生きる。」というライフスタイルの提案は、それぐらいの可能性を持った領域だと思う。一方で、事業の成長・拡大に日々汗かいて取り組みながらも、やっぱりブランドとしての物語とか、思想とか、そういう「深さ」みたいなものがコアになければいけないとも思っていて、その部分は一緒に描いて、世の中に伝えていってもらいたいなと思ってる。SANUがやろうとしているのは「自然を愛する人を増やす」というひとつの運動体・共同体を作っていく取り組みでもあるし、文化を創っていく取り組みでもあると思っていて、そこに咲ちゃんという人は不可欠だと思うんだよね。

山川：クロージングの局面で「咲に必要な居場所だと思う」って言いきってくれたの覚えてる？それは口説きたいからじゃなくて、正直な言葉だと思ったよ。私も自分の過去のすべてが指し示す未来だと思って、感覚的にYESと言った。私としても新しいフェーズな予感がしていますよ（笑）。私は今、奄美での暮らしやキャンピングカーの旅をしたここ8カ月の「自分の暮らしに集中する期間」を経て、自然と何かをしたい気持ちが溢れてきていて。でもそれは、自分がトップの世界ではなく、共に誰かと何かを作りながら、ビジネスの世界で自分という人間や自分の力を探求したいフェーズなんだよね。いくつかの事業に関わっていく予定だけど、そこには山川咲らしく真剣勝負だし、人生を賭けるつもり。自分がこれから先また起業する時もくると思うけど、人生という単位でこのブランドとは生きていきたいなと思ってる。

本間：本気の咲は怖いぞ〜と聞いているので心しています（笑）。でもほんとうに、もう楽しいけど、これからはもっと楽しみたいね。

求めている未来へ連れていくために

本間：僕たちは会社の健全性を保つためにも財務や組織だけでなく、デザインやアートなどの遊び心が大事だと思っていて。あまり自然に興味がない人との接点も作って、自然を好きになってもらうためにも、ただ会社を運営していくのではなく、斜め上からの面白さが必要だろうと。だから、役員会や株主総会とは別の場所で、誰にも縛られずにSANUを面白がってくれて、いろんな人を自然の中へ引っ張ってくれるような存在が必要だったし、それ自体が会社にとってプラスになるだろうと考えたんだよね。

福島：そうそう。お互いビジネスをしてきた経験を経て、SANUではCreative Boardという役割を作った。なので、その最初のメンバーとして山川咲に入ってもらえたのはとても嬉しいことです。具体的な役割としては、一つが人と自然、都市と田舎の関係性を深掘りして、両者をつなぐ新しい生活様式の提案をすること。もう一つがSANUの世界観をイベントやインスタレーション、ウェブメディアなどを駆使して、自由に発信してもらうこと。

山川：私自身が奄美や旅で自然と今まで以上に対峙して、独立前後は辛いことも多かったから、すごく癒されたし、救われた。奄美の満点の星空を見た時、朝日の中で海に足を浸した時、自然に抱かれてるという初めての感

覚に涙が溢れてきて。CRAZY WEDDINGより前から、ずっと人の人生に強い興味があった自分にとって、「自然」というキーワードは人生を考えた時に欠くことができないなって、前よりもっと強く思ってる。それを発信する表現の場があることはとてもパワフルなことだと思ってる。

本間：そもそも、今の自然に対する概念って3人の共通項でもある気がする。言い換えればみんなが自然に救われてるというか。

福島：咲ちゃんの奄美の展示を見に行った時に、なぜか自分の幼少期を思い出したんだよね。僕ら3人とも自然にルーツがあって、生き方も家族構成もまったく違うけど、ベースラインは一緒で、今回ような感覚を持っているんだろうなって思った。

山川：それってすごいことだと思う。誰かの原体験じゃなくて、全員が自分の体験から思いを共有できる仲間ってすごい大事。今まで自分がトップにいて、自分一人しか思っていないようなことが多かったんだけど、同じバックグラウンドを持ち合わせているなら、ほんとうに深いところでつながってるから、より深いところまでいけるはずだし。

本間：最初はSANUを遊んでもらうためのポジションとして入ってもらったんだけど、その手前の段階で、SANUを深掘りするところが全然足りなくて、それを咲がやってくれている感じがする。俺と弦はもう長いし、良くも悪くもわかり合ってるから、新しい疑問を持ちづらくて。そこに対して「SANUってなんだっけ」ということを深く考えるポジションとして、咲が入ってくれたような気がして、それは期待してた以上の役割だった。

山川：私、この事業に関わるようになって、都内でも自然の美しさに足を止めて空を見上げるようになったの。つまり知覚が変化しているというか、感じ方が変わってきている。それは一時期いい体験をすることより、はるかに人生において価値のあることだと思う。私は昔から「実感のない時代にどう実感を作るか」ということにチャレンジしてるけど、SANUが生み出したのは宿泊施設ではなくて「自分の中に自然がある、という生き方」なんだと思う。そんな、事業とかビジネスを凌駕した、人々の向かうべき未来、求めている未来を、ビジネスやシステムとして作るという挑戦は、とてもクリエイティブだと思っています。これからますます面白くなるチーム SANUを見てほしいし、参戦の仕方も面白く考えていきたいですね。

